

この資料は「検討結果報告書」の確認用資料です。

実際の検討結果報告書は、A4になりますが、
本編中の見開き状態を確認するため、
A3にて編集表現いたします。

また、本原稿はレイアウト作業前の段階です。
本原稿で使用している書体、文字サイズ等は、
最終のものではありません。

構成、内容が概ね確定してから、
レイアウトデザイン、書式を整える作業を
整えていきます。

(見開き調整のための空白)

町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会

検討結果報告書（案）

2011年 3月

町田市

はじめに

1. 町田市の博物館等の現状と課題	
(1) 検討委員会で検討することに至った経緯	4
・検討委員会で取り上げた市の博物館機能を持つ施設	
・庁内検討委員及び市民意識調査の結果	
(2) 主な博物館施設が保有する資料とその価値	7
2. 町田市の博物館等に求められる役割・機能	
(1) 文化芸術振興による地域の活性化	9
(2) 学校教育との連携	9
(3) 生涯学習への貢献	9
(4) 市民協働の場の提供	10
(5) 物を資源化する機能	11
3. 町田市の博物館等の新たな在り方の整理	
(1) 分野による3つの分類	12
(2) 各分野における問題点と課題	14
4. 町田市の博物館等が役割・機能を果たすための条件	
(1) 専門学芸員をはじめとする人材の適正な配置	17
(2) 博物館機能を持つ施設間の連携協力体制の確立	17
(3) 文化芸術都市の「顔」としての駅前ナビゲーション施設の設置	18
おわりに	
(1) 今後の取組み	19
(2) 立地についての考え方	19
(3) 検討に至らなかった事項	19
資料	
○町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会設置要綱	20
○町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会 委員名簿	20
○町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会 開催日程	21



(文例:ダミー文章)

町田市は、美術工芸分野において日本屈指のコレクションを有する町田市立博物館、内外に広く活動が評価されている町田市立国際版画美術館、地域の個性を存分に発信している自由民権資料館、縄文時代の草創期・早期・前期・中期・後期・晩期とあらゆる時期の遺物が出土する全国屈指の縄文遺跡、環境の時代に大きな意味を持つ豊かな里山の自然など、個性が輝く文化資源に恵まれています。

「町田市にはこんなにも豊かな文化資源がある」このことを、市民を始め、教育や産業・観光に携わる方々、市民活動を実践されている方々など、より多くの方々の間でしっかりと共有することが、「商業・文化芸術都市」を実現するうえで大きな力になります。そのためには、町田市にある文化資源の情報を一元的に集約整理し、多くの市民にもご参画いただいてその活用を進めていくことが重要です。

一方、現状の町田市立博物館を始めとする様々な博物館施設は、それぞれ独自の成果と実績を持ちながら、資料情報と成果の共有化、各施設の老朽化と狭隘化、人材の不足など様々な課題を抱えているため、本来の機能を発揮しきれていないことが明らかになってきました。委員会では、これら各施設が互いに個性を活かしながら一致協力して町田市の文化の顔を形成できるように、そしてより多くの文化芸術に触れる機会のある生活や、まちの活性化へとつなげていくための様々な方策を検討して参りました。

このたび委員各位の熱心な支援とワーキンググループの協力をいただきまして、ここに「文化環境都市・町田をめざして(仮)」という提言をまとめることができました。

関係各位に厚く御礼を申し上げますとともに、この提言が今後の町田市政に的確に反映され、町田市が今後も全国に輝く個性を発信していくことを希望します。

用語について

本報告書では、様々な博物館についての記載がありますので、混乱を防ぐために以下のような用語の使い方をします。

博物館： 本報告書で「博物館」と記載した場合は特定の博物館ではなく、一般論としての博物館を示します。

町田市立博物館： 本報告書では、一般の博物館と区別するため、町田市立博物館については省略せずに使用します。

博物館等： 本検討で取り上げる9つの施設を示します。(P.〇〇)

文化施設： 博物館機能を持つ施設、生涯学習や文化芸術活動と関連する各種施設全般を示します。

※作業途中のため、文中での用語統一作業が一部見整理の部分がある旨ご容赦ください。最終的にはチェック、修正を行います。

1. 町田市の博物館等の現状と課題

(1) 検討委員会で検討することに至った経緯

町田市立博物館は、開設から36年が経過し、老朽化、狭隘化が問題になっています。また、町田市では2008年7月に事業仕分けを行い、その際、町田市立博物館は「不要」と評価されました。「不要」とする主な理由は、現状の建物・設備の老朽化や立地条件に不利な点が多いために本来の役割を果たせないこと、そのため他の類似施設に統合すべきといった点が指摘されました。一方、所蔵する資料の価値を新発見・発揮することが大事、せっかくの資料が低調な利用ではもったいない、行政として郷土資料は重要であるなど、これまで収集した資料に関する評価もあり、立地条件も含めて、もっと市民に親しまれるものに再編していくべきという評価となりました。同時に、類似の博物館的な施設が市には幾つかありますが、これらの施設の連携、役割分担が今まで明確に整理できていません。これらの市の財産を十分に活かすにはどうすればいいのか、検討が必要となりました。

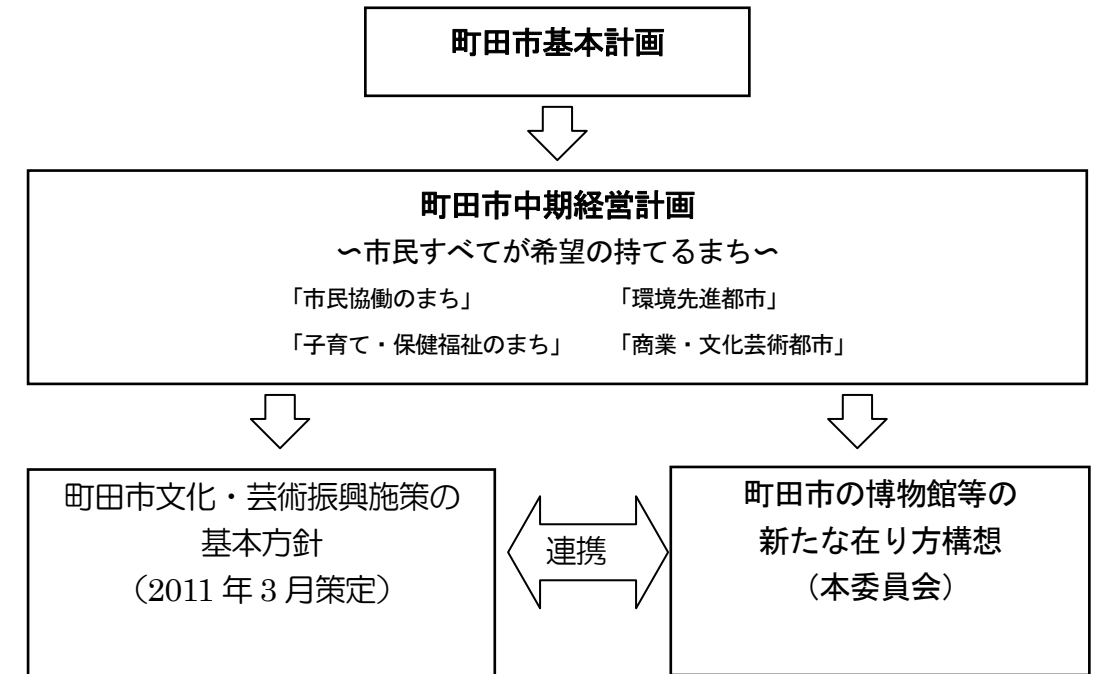
改善への提案として、市民が博物館で何を学ぶのか、何を得たいと思っているのかりサーチしたうえで、町田市立博物館単体で考えるのではなく町田市の文化施設全体の中での位置づけを明らかにしたうえで、博物館機能をどう展開するか戦略を検討すべきという指摘を受けました。

同時に、類似の博物館的な施設が市には幾つかありますが、これらの施設の連携、役割分担が今まで明確に整理できていません。これらの市の財産を十分に活かすにはどうすればいいのか、検討が必要となりました。

事業仕分けを受けて町田市では、2008年9月の経営会議にて、町田市の博物館機能の再構築に着手するため、庁内組織による検討を開始することを決定しました。「町田市博物館等の在り方検討委員会（庁内）」を設置し、2008年11月から2010年2月にかけて10回の委員会を開催、2010年3月『「町田市における博物館の在り方について」（検討委員会まとめ）』として報告書をまとめました。また市民の意向を確認する必要から、市民アンケート「町田市立博物館に関する意識調査」を実施し、上記報告書に反映しました。

これらの材料を踏まえ、町田市の博物館的な類似施設の連携、役割分担の整理、この先町田市にとってどのような博物館機能をもつことが市民にとって望ましいことなのか、またこれまで町田市が収集してきた資料を広く一般の方々にどのように活用していただけるのかについて、外部からの客観的な視野と専門的な知見に基づく検討によって、新しい町田市の博物館等の在り方を提案していただくために本委員会は設置されました。

○本検討の位置づけ



・検討委員会で取り上げた市の博物館機能を持つ施設

本委員会で取り上げた施設は下表の通りです。

施設名	所在地	開館年
町田市立博物館	本町田	1973
町田市立国際版画美術館	原町田	1987
町田市立自由民権資料館	野津田町	1986
町田市考古資料室	下小山田町	1991
町田市ふるさと農具館	野津田町	1992
忠生公園自然観察センター (がにやら自然館)	山崎	1977
萬葉草花苑	野津田町	1988
かしの木山自然公園管理棟(森の家)	成瀬	1990
町田市フォトサロン	野津田町	1999

*文学館は図書館施設として除外

1 町田市立博物館

市内の遺跡から出土した埋蔵文化財及び市内の民家に伝わる民俗文化財など、先人たちが遺した貴重な資料を収集、保存、展示するために、1973年11月3日、町田市郷土資料館として開設しました。その後、市民の芸術文化に対するニーズに応え、美術工芸品等の展示なども行えるよう1976年4月、町田市立博物館と名称を改め、現在に至っています。

市立博物館では、市内の埋蔵文化財や民俗資料、ガラス器、陶磁器、風俗画、大津絵等の美術工芸品を中心に資料の収集を行うとともに、これらを調査、研究し、展示や出版物を通じて広く公開しています。また、展示については、館収蔵資料にとどまらず借用資料による展示も行うなど、ユニークな企画を心掛けています。

2 町田市立国際版画美術館

1987年に版画を中心とした美術館として開設しました。版画を「見る」(展示)、「作る」(工房・アトリエ)、「発表する」(市民展示室、講堂)を三つの柱とし、美術との多様な関わりができることが特徴です。

3 町田市立自由民権資料館

郷土の民権家・村野常右衛門の御子孫より“自由民権運動の意義を後世に伝えるために利用してくれるなら”という条件で土地の提供を受け開館しました。自由民権運動と町田の歴史に関わるもの全般を扱うことになっていて、市域の歴史資料を抱えています。市史編纂の引継ぎ機関でもあります。

しかし、市民から見てこの館名からは歴史全般を扱っている様に見えず、町田の歴史に関する質問などは博物館や図書館に寄せられることが多くなっています。

4 町田市考古資料室

発掘調査の報告書作成、出土遺物・写真・図面などの整理作業を行なう施設です。施設の大半は収蔵と作業スペースですが、市内で考古資料を展示する施設がないこともあり、小規模な展示スペースが置かれました。考古資料は量・質とも卓越していますが、公開の場がほとんどありません。(20万点のうち、数百点のみ展示)。

5 町田市ふるさと農具館

都指定の七国山風致地区にあり、市民の農とのふれあいの場及び地域交流の場を提供する中心的施設として設置され、農の伝承施設としても機能しています。地元農家による野菜販売や景観作物などを利用した、そばの販売、野津田見本園の菜種の油絞り実演販売も行っています。

6 忠生公園自然観察センター (がにやら自然館)

自然環境を活かし、自然観察や体験学習を目的とした自然観察ゾーン(自然観察園)に併設され、展示室や講習室があります。「がにやら」は、「かきのすむ谷戸」と言う地元での呼び名に由来。

7 萬葉草花苑

万葉集に詠まれた70種の草花を中心に、年々姿を消していく山草花を守るため260種を育成栽培しています。障がい者の就労の場として活用する方針であり、町田市身体障害者福祉協会に委託しています。

8 かしの木山自然公園管理棟 (森の家)

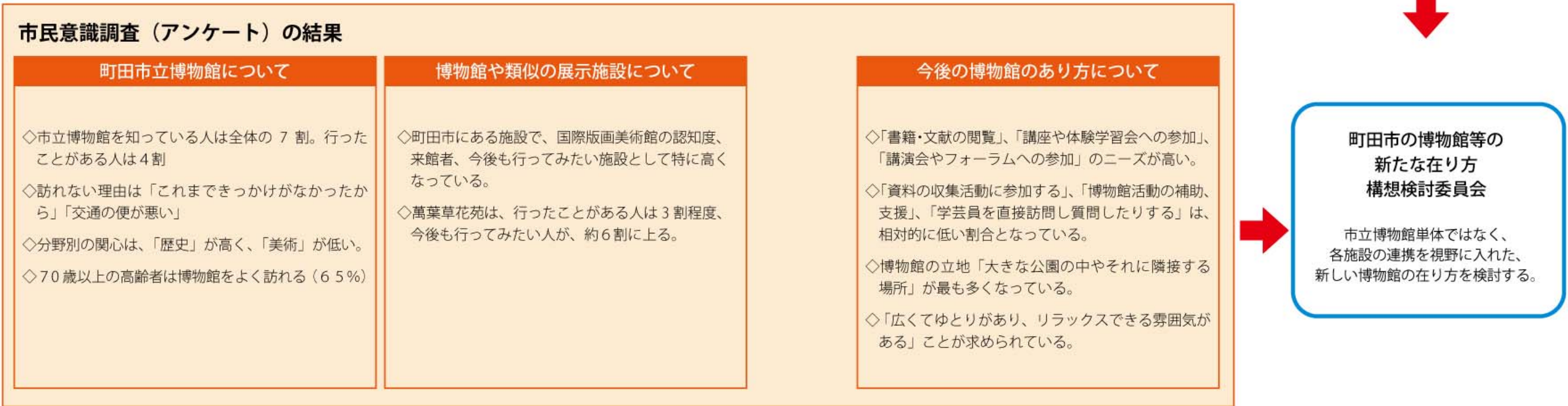
将来に大切な自然を残すために、1万人の署名活動をきっかけに実現した公園です。市民が結成した「かしの木山自然公園愛護会」が自然観察会などを自主的に行っています。

9 町田市フォトサロン

秋山庄太郎氏の寄贈写真を展示するための美術館として開設しました。2008年3月に秋山庄太郎氏の作品が撤収され、2009年4月より、市民の写真その他の文化芸術に関する活動の場として活用されています。現在はNPO法人ワークショップハーモニーを指定管理者とし、貸し館を中心として市民向け企画展なども実施しています

・庁内検討委員会および市民意識調査の結果

庁内検討会でまとめた課題と方向性			
博物館機能に関する課題	運用における課題	市民視点からの課題	環境変化への対応の課題
<p>■課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇市立博物館施設の老朽化・狭隘化 ◇博物館機能を有する施設が組織的に分散、連携が弱い <p>■今後の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇市民のニーズが高い“自然とのふれあい”や“体験”などの充実。 ◇市民は、文化活動を始めるきっかけになるような体験や参加を求めているので、そうしたプログラムを開発できる体制の整備が必要。 	<p>■課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇地域資源活用場が少ない ◇地域資料、考古・歴史資料の収集・整理・展示が弱い <p>■今後の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇各館がそれぞれの独自性を発揮するとともに、セントラル機能を有する情報拠点を確立することにより、町田市の文化やそれに関連する情報の収集・発信ならびに企画や活動に関するネットワーク化を図る。 	<p>■課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇資料陳列型の従来型博物館への関心が薄れている ◇博物館への市民の期待と実態に差（市立博物館と市の歴史） <p>■今後の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇町田市の博物館として、人間が生きていくための昔からの生活の知恵などが受け継がれてきたものを、伝えていくことは大きな役割。 ◇「広くてゆとりがあり、リラックスできる雰囲気がある」博物館、市内外で連携し市民が共に学べる場が求められている。 	<p>■課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇教育機能、地域貢献などの新たな課題への対応が遅滞 ◇館内外の人材活躍の場の提供が不十分 ◇新たな博物館のあり方の再構築が必要 <p>■今後の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇学芸員は社会環境の変化を受けて、新たな役割を積極的に担っていく。 ◇専門的知識と一般の人との間に立ったコミュニケーターとして活躍していく。 ◇地域人材と資源の活用や観光など産業分野との連携による文化活動の活性化。



(2) 主な博物館施設が保有する資料とその価値

町田市の博物館施設には、貴重な資料が豊富に収集されています。国内の自治体を持つ施設の中では随一の規模を誇る美術工芸分野のコレクション、縄文時代のすべての時期の資料が出土する全国的にも希少な価値を持つ考古資料、町田の独自性を語る自由民権資料をはじめ、町田独自の個性を発露し、日本各地の博物館から資料借用の引き合いがあるなど、全国に名前が知られています。

美術工芸分野では卓越した資料収集活動の成果があり、また資料の調査研究も進み、市民の利活用に供する様々な方策が検討されています。一方、歴史民俗分野では、これまでの発掘調査や、市民が保有する歴史資料の所在調査などの活動が結実し、たいへん豊かな資料コレクションが構築されています。しかし収集した資料を市民一般に公開・提供するための体制が整備されておらず、基礎的な調査研究が進んでいません。資料コレクションが豊富なだけに、現在の人員体制では手が足りないことが大きな要因と考えられます。

せっかく全国的にも高い価値を持つ資料を豊富に有していながら、市民一般に公開・提供し利活用していただくための準備作業がままならない状況は、情報の一元化と体制の強化などにより改善する必要があります。

○市立博物館

収蔵資料は、美術工芸・絵画・考古・民俗資料が大半を占めます。考古資料は昭和51年度以前の発掘調査による出土資料です。民俗資料は生活の変化に伴い、市民から持ち込まれたものがほとんどです。美術工芸、絵画は、展覧会開催後の出展作品一括購入や寄贈が収集の核となっています。収集方針は資料収集委員会での検討に基づき、美術品として公的機関が収蔵するに足る水準を保持しているもので、既存のコレクションと関連の深いものか、単独で展覧会が開催できるだけの一定数の群を成すコレクションで、将来的な展開が期待されるものであることが必要と認識されています。

ガラス

チェコガラスを中心とするイタリア・フランス・スペイン等のヨーロッパガラスと中国清朝のガラス、薩摩切子、日本近代ガラス芸術の先駆者とされる岩田藤七・久利の作品が核となります。公立館では日本で三指に入るコレクションです。

陶磁器

ベトナム・タイ・カンボジア・ミャンマー・ラオス等東南アジア陶磁、中国陶磁、日本近代の染付磁器が核となります。東南アジア陶磁は日本最大のコレクションです。

大津絵

最も優れた典型的な日本の民画で、浮世絵や陶磁器、日本舞踊などにも影響を与えたものです。公開されている大津絵コレクションとしては日本民藝館に次ぐ日本第2のコレクションです。

戯画・風俗画

田河水泡氏が収集した幕末から近代までの戯画、風俗画を核とします。近代の世相や風俗をうかがわせる、鯨絵や疱瘡絵、漫画などで、歴史資料としても美術作品としても活用が可能です。

時計

ヨーロッパ及びアメリカ製の懐中時計で、最も古いものは1700年製です。機械というよりは美術品としての価値が高く、特に内部がオリジナルのままのものがほとんどであり、現在でも作動する点が貴重といえます。

民俗資料

近世末から昭和前期までの町田市域や多摩地区の生活資料が中心です。

考古資料

昭和51年度以前の町田市内の遺跡発掘調査による出土品が中心です。鶴川遺跡の占める割合が比較的大きくなっています。

○国際版画美術館

内外にわたる美術・文化の交流の場として、版画を中心とする幅広い活動を展開しています。市民の美術に関する知識及び教養の向上を図り、市民文化の発展に寄与するため、内外のすぐれた版画を中心とした美術作品及び美術に関する資料を収集、保管、展示しています。

【収蔵資料の内訳】

日本の版画 70% 海外の版画 30%、近・現代の版画 約80% それ以前の版画 約20%
町田ゆかりの版画家・美術家：畦地梅太郎、若林奮、柄澤齊、門坂流、田中陽子、三井寿、飯田善國、松本晃、坂東壮一等 総計約2,100点

○自由民権資料館

民権家・村野常衛門のご子孫が、自由民権運動の意義を後世に伝えるために利用してほしい、との条件で民権運動縁の地を提供してくださいました。当時町田市は市史編さん事業を終えたところであり、市史編さん業務の引継ぎ機関をかねて、自由民権資料館として建設されました。

原則は市内の旧家文書を、寄贈・寄託・借用契約により収集・保管しています。また、微々たる量ではありますが、展示で利用可能な民権運動関係資料（刊行物・刷り物など）は、購入により収集しています。

古文書（旧家文書等）

市内の旧家文書で、近世後期～戦前期のものがほとんどです。市域の民権運動の資料及び、旧家文書内の刊行物・刷り物もここに含めています。

近世・近代刊行物

民権期を中心にした時期の単行本・雑誌や、「家永三郎文庫」や閉館となった都近代文学館から譲渡されたものなどです。

公文書（旧役場文書等）

各支所など各部署に残されていたものを移管しています。村によっては「村会議事録」明治・大正期のなど村の基本史料があります。

刷り物（錦絵等）

国会議事堂、憲法発布など民権運動に関係するものです。

○考古資料室（ほか生涯学習課が保有する考古資料）

市内の遺跡から発掘された遺物・調査記録を保管しています。現在コンテナ換算で11511箱の発掘資料があります。年間コンテナ約50箱の遺物が出土し、収蔵資料が増加しています。全国屈指の縄文時代の資料を保有しながら展示施設がありません。

縄文時代

縄文時代の草創期・早期・前期・中期・後期・晩期とあらゆる時期の遺物があり、町田は縄文の宝庫といえます。

弥生時代

近年の調査で方形周溝墓や環濠集落の一部と考えられる遺構が発見され、出土遺物も増大しています。

古墳時代

横穴墓群が数多く存在し、その副葬品類の出土が見られます。

奈良・平安時代

武蔵国分寺へ瓦を供給した南多摩窯跡群があります。

中世

1万枚を超える能ヶ谷出土銭や板碑などの遺物が出土しています。

2. 町田市の博物館等に求められる役割・機能

町田市には独自に築き上げてきた個性ある文化施設群、これまでの博物館の実績としての評価が高く豊富な資料、市民による自主的な活動の土壌、豊かな自然環境、潜在的集客力が存在します。博物館等の文化施設こそ、町田市が持つこうした文化資源の力を引き出して結集し、市民の生き生きした活動をまちの活性化の原動力へと結びつける役割を果たすことができる機関といえます。

このような役割・機能を博物館が果たすためには、これまで充実させてきた基礎的な学芸活動に加えて、新しい時代に相応しい今日的な視点が求められます。以下に、これからの町田市の博物館等に求められる新しい役割・機能について、検討したものを提示します。

(1) 文化芸術振興による地域の活性化

市民の文化芸術活動が賑わうことで、その活力がまちの商業活動の活性化にも結びつくような、市全体を文化資源として形成して行くしくみの検討が必要です。単なる施設整備ではなく、長期的なまちとの連携・成長シナリオが重要です。

まちを元気にするのは、特別な出来事や特定のリーダーの牽引によるものではありません。おのおのの市民がそれぞれの市民生活や商業活動を展開する過程で、斬新な創造性や豊かな感受性を発揮できるようなまちでなければ、継続的な活性化は望めません。市民にこうした活力を持ってもらうために、文化芸術は欠かせない重要な要素です。

芸術の鑑賞は、地域性にとどまらない広い視野を人々に与えてくれます。歴史文化は、郷土に根付いた暮らしの知恵と、ふるさとへの誇りと愛着を提供してくれます。芸術は芸術、古いものは古いもの、といった視点ではなく、私たちの生活との関わりの中で、町田市の文化資源をどう活用できるのか、考えることが重要ではないでしょうか。

たとえば、市民を始め幅広い人々が訪れる駅周辺などで、町田市ならではの文化芸術の存在感を発揮する、文化観光や歴史観光の情報を共有して発信する。地域の文化芸術をテーマとするさまざまなイベントを継続的に実施することで、市民をまきこみ気持ちを一つにする新しいムーブメントを起こすことができます。それは、結果として立派なまち興しにつながるのです。

(2) 学校教育との連携

○知のネットワークづくり

町田市に住む子どもたちを、知を追求していく子どもたちに育てたい。そんな教育の思いをかなえるためには、子どもたちが芸術に触れたり知を求めたりする、多様なチャンスが必要です。

学校が協力しながら、子どもたちが知への欲求を掘り起こして深めていけるよう、点在しているさまざまな文化資産を知のネットワークとして活用できるプログラムの開発と、一元的な情報管理・発信のための情報センター機能が求められます。

○小中学校の学習における資料等の有効活用

博物館には学校教育に資することができる文化資源が豊富にあります。文化資源を有効に教育に活用するには、博物館と学校の連携が重要になります。これからの博物館では、こうした連携の窓口として、学校に提供できる様々な学習プログラムを開発し、利用促進を図っていく機能が求められます。

そのためには、従来の学芸員にとどまらず、学習指導要領や学校側のカリキュラム策定過程を熟知した、教育普及専門の人材が欠かせません。こうした人材を中心に、子どもの参加できるプログラムの明示化、学校が取り入れやすいスケジュール化、鑑賞教育カリキュラムの共同開発などを進めることが必要です。また複数の文化施設の学校教育活用を一元的に情報を整理・発信するセンター機能が求められます。

- プログラム開発
- カリキュラム調整
- スケジュール調整
- モデル授業開発・教員研修
- 教材開発
- 教育ノウハウの共有

○大学との連携（連携企画事業、人材交流、学生の活動の場の提供、調査研究における相互協力など）

大学では教育の一環として大学付属博物館が有効に活用されています。学芸員の学校教育に対する役割の研究や、博物館を活用した鑑賞教育カリキュラムの開発などが行われています。子どもたちが「本物」の資料に触れることの効果、その時の感動を学習体験として子どもたちに定着させるために、普及教育スタッフや教員が、促すべきコミュニケーションのあり方など実践的な課題に取り組んでいるのです。

町田市にある大学のこうした成果を活用することは、これからの町田市の博物館における普及事業の充実を図る上で、非常に有効です。また大学にとっても、学生達に実践の場として町田市の博物館等を活用して貰うことは有意義であると考えられます。

- 大学博物館等で行われている活動の導入
- 博物館等の職員の研修、スキルアップ
- 大学生にとっての実習の場
- 観光、集客、マーケティング、広報等、大学研究室が持つノウハウを博物館等が学ぶ

(3) 生涯学習への貢献

町田市ではいま、生涯学習ニーズが高まっています。まちだ市民大学 HATS の講座には、郷土史や町田の自然を勉強したいという学習意欲の高い市民が集まり、大きな盛況を見せています。こうした市民のニーズに対し、町田市の博物館等はさまざまな学習機会を提供できます。

収蔵資料の公開にとどまらず、資料等を有効に活用し参加体験型のワークショップを開催するなど、市民が共有する文化資産として、生涯学習に大きく貢献することができるのです。

現在、町田市では、生涯学習部、文化スポーツ振興部や、高齢者福祉関係の部局など、さまざまな部署で生涯学習関連の事業が行われています。生涯学習のカリキュラムに関わる情報を一元的に管理・提供していくプログラムを検討し、周辺の大学の生涯学習事業とも連携しながら、博物館等の活用を組み込んでいくことが求められます。

○地域のことを知りたいアクティブシルバー層

定年退職後のアクティブシルバーの方々を中心に、あらためて自分の住んでいる地域がどのように成り立ってきたのかに高い興味や関心を持つ人々が増えています。地域の昔のこと、移り変わってきた地域の風景や社会について、自分の子や孫に語りたいたいという方も増えています。そうした方々を中心に、各地で「古文書の読み解き講座」や「地域の史跡巡り」といった博物館プログラムや、「まちの記憶コレクション」として、市民が持っている昔の写真や、昔の地域のことをよく知る方々にお話を伺うといった活動も広がりを見せています。特に町田市は早くから東京のベッドタウンとして発展してきたため、他地域から移入して来て定着した方が多く、地域のことをもっと良く知りたいというニーズが高くなっています。

○環境問題と昔の暮らし

江戸時代や明治初期の暮らしでは、今ほど物が豊かではなかったため、物を大切に使うための様々な工夫が凝らされていました。環境問題を抱える現代社会からの視点でこうした昔の暮らしの中にある節約の工夫をヒントに現代的な3R（リデュース、リサイクル、リユース）に取り入れようという活動が最近注目され、環境活動と郷土教育の連携が各地で試みられています。

だれもが自分のくらしの中で実践できる暮らしの工夫などは、生涯学習のテーマとしても大変人気のある分野です。こうしたプログラムを展開するうえで、博物館が持つ資料や情報は、単なる座学の講座だけでは得られない、実物によるリアリティを提供し、より豊かな体験を提供するうえで貢献できます。

町田市には豊かな里山が現存しています。自然環境と歴史が互いに影響し合いながら現代に残されて来た現場の体験もプログラムとして開発していくことで、博物館と生涯学習とフィールドを使った参加体験やワークショップの相乗効果を発揮できます。

（４）市民協働の場の提供

現代の地方行政には、積極的に市民の参画を得て協働により施策を展開することが期待されています。地域の文化施設には、自らのまちをより良くしたいという同じ気持ち・立場で、市民と行政が共に文化を創っていく場としての役割が求められます。文化・芸術振興においても、一部の愛好家や研究者が文化や芸術を担うのではなく、市民と行政が一緒になって共に暮らしを豊かにするための博物館づくりに取り組むような方向性が求められます。市民が集い、さまざまな知恵や経験、労力などの資源を出し合う、そんな人的なネットワークを作り、発展させていく拠点として、博物館等が機能するのです。

文化・芸術を共に楽しみ、共に参加する機会と場を通して、市民同士の対話や交流が活発になれば、地域の課題や問題意識を共有するきっかけにもなっていきます。普段の暮らしのなかで、多くの人がこれからの町田市をともに考えていくきっかけとして、様々な課題解決と結びつけていくことが可能です。地域の博物館はこうした形で、町田市を良くしたいと思う人々を結びつけるための場として機能させることができます。

博物館には様々な文化資源があるので、その時その時の社会の関心と結びつきやすいテーマを取り上げ、同じテーマに関心を持つ人々の交流の輪を形成するための場を提供し、楽しみながら仲間づくりができる環境を整えることができます。市民が主体となったイベントへの協力や、多様なテーマのワークショップ活動への場の提供、施設の文化活動への参加促進など、市民が協働する“広場”として何ができるかを追求する必要があります。

積極的な市民層は現在でも多くの活動に取り組んでいます。こうした方々との連携からはじめ、これからは、より多くの人々の参加のきっかけづくりが求められます。既存 NPO 団体や愛好会の活動情報を集約し、協働できる相手とのマッチングやコーディネーションが求められています。趣味やレクリエーション、遊びを入口に、興味の異なる市民層に対して幅広い活動メニューの充実が求められます。参加者数が拡大すれば、町田市独自のムーブメントづくりが展開できます。やがて文化芸術に関するキャンペーンやイベントがまちの中心部で多く開かれる様になり、まち自体がいきいきとしていきます。

(5)モノを文化資源化する機能

収集されたモノ（資料）は、整理・保存、調査・研究を行わなければ、せっかくの価値を埋没させ、物理的な劣化を起こすという事態に至ります。逆に、資料に関する整理・保存、調査・研究が進めば、その資料に関する新たな解釈や価値が生まれます。調査が進んだ資料は、展示活動によって、多くの人々がその存在や意味に触れることが出来るようになります。さらに関連するイベントや教育プログラムは、その資料に対する理解を深めます。

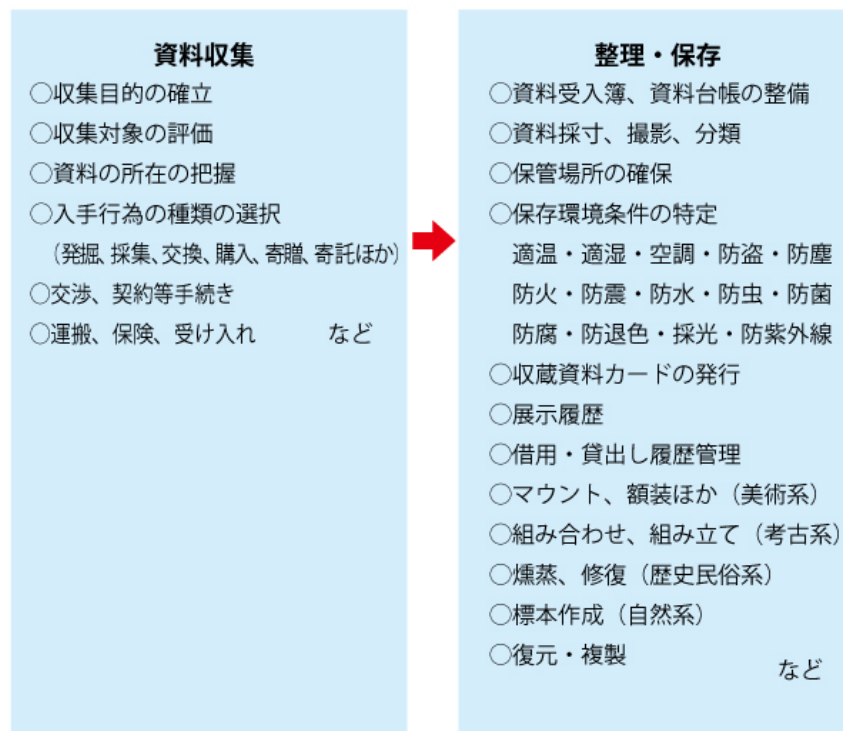
博物館の重要な活動である「収集保存」「調査研究」「展示公開」「教育普及」の4つの柱は、「収集保存」「調査研究」という意味や価値を明らかにする一次機能と、「展示公開」「教育普及」という資料の有効な利活用を通して、社会にその意味や価値を還元する二次機能に分けられます。

各機能の各活動においては、それぞれ専門的な人材と環境が必要となります。施設の設置理念や特性によって、各機能のどこに重点を置くかについては、多様な可能性があります。以下の流れのいずれが欠けても博物館はその機能を十分に発揮することができません。

一次機能：「モノ」を「文化資源」とするための基礎的な機能

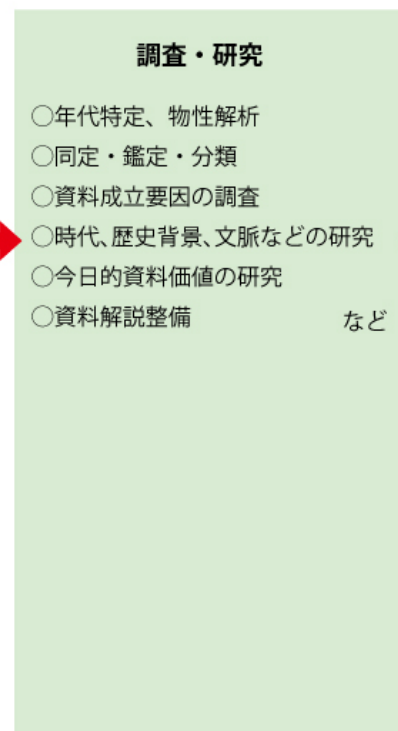
収集保存

人々の知恵が込められた資料を次世代の人達に受け継ぐために散逸しないよう収集し、消失・破損から保護する機能



調査研究

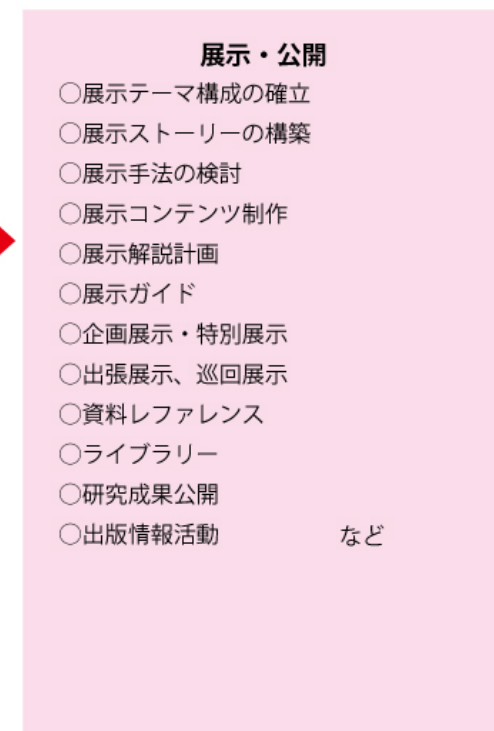
資料がもつ意味や価値を現代的視点から読み解き明らかにする機能



二次機能：「文化資源」を利活用する機能

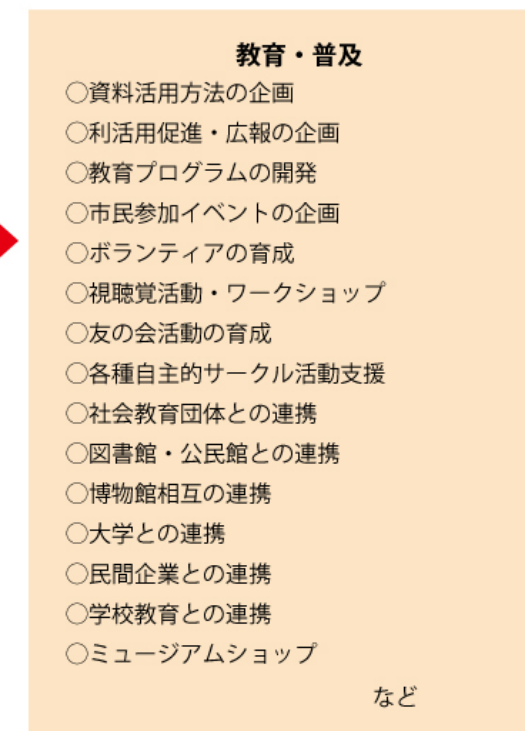
展示公開

資料がもつ意味や価値にいつでも、だれでも、触れられるようにする機能



教育普及

資料がもつ意味や価値の読み解き方や、活用の仕方を共有する機能



3. 町田市の博物館等の新たな在り方の整理

(1) 分野による3つの分類

町田市の博物館機能を持つ施設は、個々の施設ごとに活動を展開してきたため、施設間での機能や役割の重複もあれば、逆にどこも担いきれていない機能などもあります。そのため、個々の課題を挙げることはできても、全体としての問題は浮かび上がりにくい状態になっています。総合的な対策を検討するためには、施設単体の課題ではなく、類似機能を持った施設群を設定し、各施設群ごとに課題を一元的に整理する必要があると考えられます。

町田市の文化施設は、その意義や目的の違いから、大きく美術系、歴史民俗系、自然系の3つに大別できます。

○美術系

町田市立国際版画美術館

町田市立博物館のうち美術工芸部門およびその資料

○歴史民俗系

町田市立博物館のうち考古歴史民俗部門およびその資料

町田立自由民権資料館

町田市考古資料室

町田市ふるさと農具館

○自然系

忠生公園自然観察センター（がにやら自然館）

萬葉草花苑

かしの木山自然公園管理棟（森の家）

※フォトサロンは性格が異なるため上記施設群には含めません。

※文学館の位置づけの検討が必要です。

○3分野共通の課題

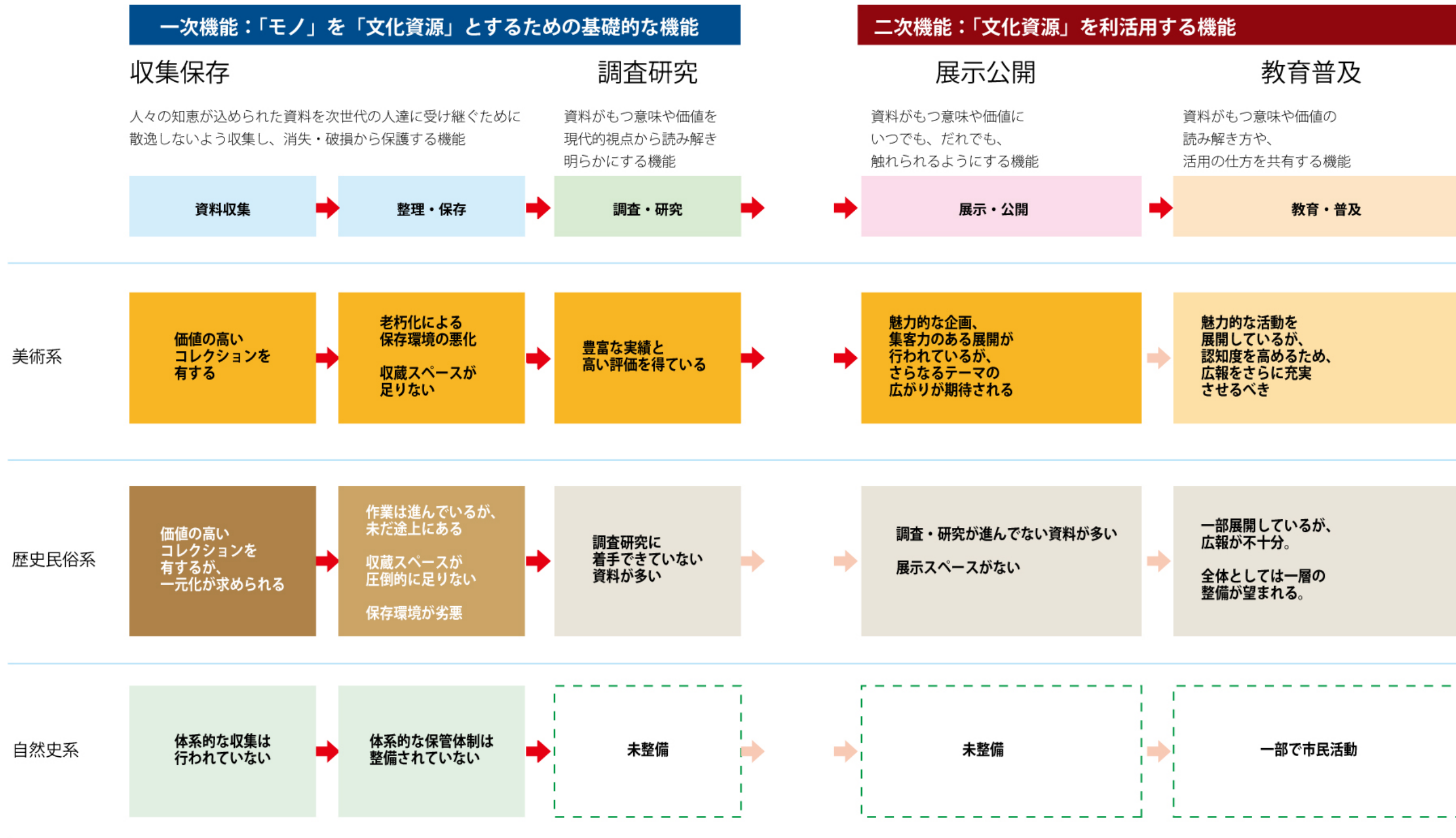
- それぞれの施設群には、核となる施設（情報センター的機能）が必要です。
- それぞれの施設群の特徴を強く打ち出していくことが必要です。
- 一方、個々の施設のこれまでの実績と個性を継承しつつ、発展させることが重要です。
- 施設どうしの統合・分散も視野に入れておく必要があります。
- 検討材料となった9施設以外の施設も視野に入れておく必要があります。
- 施設群ごとに地理的に集約すべきです。
- 町田市立の博物館だから地域のことを重視するのは共通の認識だと思いますが、テーマによっては他地域の資料との比較などが効果を発揮する場合があります。町田市ということにがんじがらめにならずに、地域性の定義はゆるやかなものとしておくことが重要です。
- 博物館をどういう場にするのか、生涯学習の場なのか、地域に根ざした博物館にするのか、どういう性格付けにするのか、市の方針をしっかりと持つことが重要です。
- 施設の安全性について配慮する必要があります。地盤や、建物そのものの防災、耐震性など、あらゆる面で検討する必要があります。

○町田市の文化資源のもつ特性の共通認識化

上記のさまざまな課題を克服していく上で大変重要となるのが、町田市の文化資源が持つ特性をしっかりと関係者のあいだで共通認識するという作業です。この作業には前章で取り上げた、「(5)モノを文化資源化する機能」が重要となります。委員会では、先ほど分類した3分野について、それぞれ「(5)モノを文化資源化する機能」がどのように働いているかを検討しました。

○各分野の、文化資源化機能の検討

博物館の3分野ごとに「(5)モノを文化資源化する機能」の現状を検証すると、以下の様な状況であることが分かりました。



(2) 各分野における問題点と課題

○美術系

美術系については、市民意識調査の中で国際版画美術館の認知度が最も高く、行ったことがある施設としても国際版画美術館が他の博物館施設に比べて際立って高くなっています。このように国際版画美術館は町田市における文化・芸術の顔となっています。一方、国際版画美術館ほど市民に認知されていないものの、町田市立博物館も美術工芸資料では質・量ともに全国トップレベルであり、毎年質の高い企画展を開催し続けてきました。

現在、市立博物館は施設の老朽化と収蔵庫の狭隘化が進み、高齢化と立地条件の悪さから年々来館者数が逡減する傾向が見られます。また、博物館という名称であるがゆえに、現在の美術工芸における活動が正当に評価されず、市民に十分に伝えられていない状況にあります。

今後、市立博物館が持つ貴重な財産をより有効に活用していくためには、全国的知名度のある国際版画美術館と機能を補完し合うような形で併設し、組織の整理統合を図るとともに、事業費コストを削減しつつ、両館の併設による相乗効果から集客増を図る様な事業展開をすることが望ましいと思われれます。

※ 文学館も含めた「文化芸術」という範疇はどうか？検討が必要

主な課題

- 美術系の施設が集まった美術ゾーンの形成が求められます。
- 国際版画美術館が美術ゾーンの中心的役割を担います。
- 市立博物館の美術工芸系資料は集客力があるので、立地条件さえ整えばリピーターを十分に確保できます。
- 市立博物館の美術工芸機能を物理的に国際版画美術館に近づけたほうが、相乗効果が期待できます。
- 全国的な視野、世界史的な視野で収集展示するという考え方から、美術系は目を外に向けた必要があります。
- バリアフリー、アクセスの向上が求められます。
- 館名はこれまでの実績を持つブランド力を活かして並立し、運用組織は一体化する手法も考えられます。
- 市立博物館が持つ美術工芸資料の保管場所の確保が急務です。現状のままでは貴重な資料が痛んでしまいます。
- 所蔵作品は素材ごとに最適な環境（特に湿度）が異なるため、それぞれの作品に適した収蔵庫が求められます。

○歴史民俗系

歴史民俗系については、庁内検討会の報告書の中で「町田市の博物館として、人間が生きていくための昔からの生活の知恵などが受け継がれて来たものを、伝えていくことは大きな役割」と整理されており、市民意識調査でも「町田市の歴史や民俗・考古分野の展示が常設されている施設」への要望が高い割合となっています。

町田市の歴史を学べる場としては、文献資料では「図書館、自由民権資料館」、実物資料では「自由民権資料館」が挙げられます。所管はまちまちであり、所在も各地域に散在しているため、市民が利用しやすい状況にあるとはいえません。

将来的に「歴史民俗資料館」のような核となる施設ができることが望ましいのですが、その前に市民が現有の施設等を有効に活用できるよう資料管理や情報管理の一元化を図るとともに、市民に広く知らしめるための広報活動を充実させることが必要と思われれます。

主な課題（事務局注：課題が多岐に渡るため、今後各項目ごとに重複を整理していきます。）

○情報の一元化

- ◇ 歴史資料の情報をどこでキャッチするか、その情報センター機能をどこに持たせるかが課題です。
- ◇ 町田市には公文書館がないため、文献資料がどこにあるか、民間も含めて情報をどこかで集約する必要があります。
- ◇ 古文書をどこがどのように収集し、保存していくか明確にすることも、とても重要です。公文書も含めて、受け皿をどこかで考えておく必要があります。

○リピーターの確保

- ◇ リピーターを獲得する工夫は必要です。
- ◇ 固定展示にならない様な工夫が重要です。
- ◇ 体験展示、参加展示、活動プログラムなどの充実が求められます。
- ◇ 市民大学の歴史講座の受講生をみると、市史を勉強したいと思っている人がたくさんいることが分かります。市民の学習活動の場を提供していくような活動がどこかで担えると良いでしょう。
- ◇ 土器片を復元するとか、手で触れて自分たちで作ってみるという、参加体験型の利活用による魅力づくりが考えられます。

○通史展示の整備

- ◇ 市民を対象としたアンケートでは通史展示の要望があります。
- ◇ 学校現場では、子どもは絶えず次世代へ移っていくため、郷土史を学習するニーズは常にあります。

- ◇ 地域の歴史を知りたいというのは大切なことです。
- ◇ 自然史から始まって歴史に流れ込むような方法も大変良いアプローチだと思います。

○資料収集の考え方

- ◇ 地域性の資料は重要ですが、テーマによっては視野を広く持つ必要があります。
- ◇ 今起こっていることも含めて保存していくという視点で考えると、範囲も広がってきます。
- ◇ 通史展示を含めて資料整理をして、鎌倉街道や絹の道など多角的に郷土史を捉えていくことが重要です。
- ◇ 民俗資料は割と系統的に集められています。農耕具や養蚕関係は非常に良い資料です。ただ、保管場所が廃校であるため、長期間このまま放置しておくのは問題があります。

○自由民権資料館のより一層の個性発揮

- ◇ 自由民権資料館は非常に個性のある大変良い資料館だと思います。
- ◇ 自由民権資料館は、本当にテーマに相応しい内実を持った実績を残している館なのか、時としてその名前が重荷になっていないか、検討する必要があります。

○組織体制・人材の問題

- ◇ 縄文資料は豊富にあるのに、活用する人材が不足しています。
- ◇ これまでは縄文遺跡の保護に随分労力を費やしてきました。出土した資料の活用まで手が回らないのが現状です。また収集しているものを展示する場所がないというのも、悩みの種となっています。
- ◇ 資料の教材化、教育プログラムの立案、学校カリキュラムとの調整をきちっと計画をもってやる人材がいるかどうかは問題です。
- ◇ 町田市史の取扱いは、自由民権資料館条例の設置目的に規定されていますが、現実問題として古代・中世までの部分の学芸員はいません。
- ◇ 市史編纂に関してはプロジェクトチームを設けて行っていく必要があります。

○自然系

町田市には豊かな里山が残っており、東京都の中では稀有な存在です。環境教育という今日的課題において、こうした里山の活用な大きな注目を集めています。

庁内検討会の報告書においても、「自然とのふれあいや体験に関する市民のニーズは高い。体験や参加は、市民が文化活動を始めるきっかけとなる。」と整理されており、市民意識調査でも自然科学分野を重要と思う人は、文化活動への参加意向が高いという傾向が見られました。

町田市には町田市全体の自然を扱った博物館はありませんが、緑豊かな都市で自然保護団体の活動も活発です。市民大学講座においても長年町田市の自然に関する講座が行われており、受講した市民もかなりの数に上っています。

町田市には、四季折々の自然を楽しめる薬師池公園があり、その周辺には「ぼたん園」「えびね苑」「ダリア園」「リス園」「フォトサロン」など観光資源が豊富にあることから。この周辺に町田市全体の自然を学べる拠点となる施設を整備することが望ましいと思われます。

主な課題

- 環境問題の視点から、里山景観保存の重要性が指摘されています
- 環境教育の観点から、自然系における環境リーダー、専門家による里山学習などのフィールド実習が望まれます。地域連携、市民参加の意味でも有効です。
- 現状ではどの施設も公園もしくはその付帯施設であり、博物館機能とは言えません。
- 自然のある公園などに、センター機能を持った拠点施設の整備が求められます。
- 実際に自然にある公園のよさを取り入れながら取り組むことが重要です。
- 地域の特性をしっかりと捉えることが重要です。

■「自然系」の捉え方

自然系で扱う内容は、実に広範囲に及ぶ可能性があります。呼び方も単に「自然系」という以外にも、「自然史系」「自然科学系」「自然環境系」などの候補が検討されましたが、本委員会ではなるべく将来の可能性を限定しないために、分野限定的な表現を避けて「自然系」としています。

「自然史系」

自然史系とした場合は、今現在の動植物だけではなく、地球の大地の形成や生命の誕生と進化など、長い時間に渡る自然の営みの継続性をメッセージする色合いが強くなります。悠久の生命のつながりの中で現在の町田市の自然環境を捉える場合はこの表現を用います

「自然科学系」

自然科学は、人が自分の周りの世界をどのように見て知ることができるか、という広いテーマを扱うこととなります。いわゆる自然の動植物以外にも、天文や理工、実験と科学原理などの分野も対象となります。町田市にはまだ科学館や、科学教育センターといったこの分野を扱う機能はつくられていません。

「自然環境系」

今日的課題としての環境問題の視点で町田市の自然を扱う場合はこうした呼び方が相応しいと言えます。「自然環境系」とした場合の特徴は、分野が社会全般に及ぶという点です。ゴミ問題、公害対策、3R問題、公園緑地、生物多様性、食糧供給、環境教育、地域コミュニティ、環境福祉、省エネ、環境インフラなど、くらしに関わる分野すべてにわたって話題が及びます。このテーマで活動展開する場合は、町田市のほとんどの部局が関わってくるため、組織横断的な体制が必要となります。

4. 町田市の博物館等が役割・機能を果たすための条件

(1) 専門学芸員をはじめとする人材の適正な配置

○業務特性と必要な人材の特徴

博物館は研究機関であると同時に文化資源の生産現場でもあります。市民の生活の質的向上をはかるための、地域の「文化価値」と「体験価値」を産み出していくための生産的な働きが求められます。こうした価値の生産を進めるためには専門性と同時に広い視野を持った人材が求められます。

専門職

博物館の仕事は、収集したコレクションの価値を引き出して活用するために、コレクションそのものに対する深い造詣が求められます。また博物館の事業は、他の博物館、関連の研究機関、マスコミの文化芸術担当などとの協力関係なしには展開できません。特に展示においては、単独の館の資料だけでなく他施設からの資料の借用、複製許諾などが必要ですが、長期にわたる信頼関係なくしてこうした協力を得られるものではありません。一つの展示を企画し、それを実現に結びつけるには、長い時は10年以上の歳月がかかることもあります。資料収集などでも、個人蔵の寄託を受けるために15年以上通ったなどの事例もあります。近年では博物館における専門職には以下の職種が求められます。

- 研究・企画専門学芸職（調査研究にもとづく各種展示の企画と実施）
- 教育・普及専門学芸職（学校教育・生涯教育支援、講座の企画・実施）

これまでの博物館では、これら全てを同じ職員が行わざるを得ない状況から、学芸員ならぬ雑芸員などといわれた時期もありました。近年では多様化する利用者ニーズと社会からの要請の高度化に応えるため、それぞれの専門担当を置く施設が増えています。

○10年先20年先を見越した長期的視野にたった人材の配置と育成

以上の様な仕事の特性から、博物館の職員には長期計画に基づいた継続的なキャリア形成が必要となります。特に町田市のように高い独自性や優れた個性を持つ博物館等では他館にはない専門的知識と資料取り扱いノウハウが必要となるため、一朝一夕に必要な人材を確保することは困難です。国内外の調査、担当分野に対する絶え間なき研鑽、論文執筆、学会出席、業界関係者との情報交換を繰り返すことで、魅力ある展示活動に必要なスキルを身につけていく環境が必要となります。

また、企画展示等を実施するにあたっては、協力機関や監修者、資料借用先の担当者との交渉などを経て実現までに3～4年程度の時間が必要です。そのため、任期制限のある雇用形態では業務を担当することができず、有効に機能しません。管理上、博物館活動計画を立てる上でも流動的なスタッフ雇用では予定が立たず、効果的な活動を展開する上での支障となります。従って博物館等の人材は長期的な計画性が重要となります。

○博物館機能の空白部分の補充

歴史民俗分野ならびに考古分野については、絶対的に職員の人数が不足しています。自然系は全体的に未整備であるため、自然系の博物館活動を展開する場合は、人員確保を含む一からの構想検討が必要です。また、美術系を含め教育普及分野の職員も絶対数が不足しています。

○市民ボランティアの育成とその活用

博物館における市民ボランティアの育成と活用は近年大変注目されており、十分な準備をもって導入することができれば、地域の人々の交流の活性化や、コミュニティーの形成に大きく貢献できる事業です。市民の「自分にできることで役に立ちたい」というニーズは高まっており、博物館はそのための格好の舞台として活用できます。

博物館におけるボランティアの活躍の場としては、展示解説など専門知識が要求されるものもあれば、作業補助的なものまで、多様な領域と水準に及びます。基本的にはどの場面でも基幹となる職員がいて、ボランティアに担っていただく業務のひな形を示し、利用者に対するサービスとしての品質管理を行うことが必要です。

また、市民ボランティアの育成は、教育事業そのものです。足りない人手を無償で補おうというのではなく、ボランティア精神、公共サービスの役割と責任、博物館活動に関する基礎的な知識などを理解して頂きながら参加していただく必要があります。そのためには各種ボランティア養成講座を行う体制が求められます。

(2) 博物館機能を持つ施設間の連携協力体制の確立

○情報の共有化

町田市の博物館等の業務効率化を進めるためには、どこになにがあり、なにが足りないのかを関係各者がいつでも確認できる状態をつくる必要があります。検討に挙げた博物館等をはじめ、それ以外にも各図書館や民間の博物館等など町田市にある文化資源を保有するあらゆる機関と情報連携の体制を確立し、一元的な町田市の文化資産の目録化、さらにはデータベース構築などを検討すべきです。また、教育普及分野では市民の興味関心に的確に応える生涯学習機会を提供するために、ノウハウの共有、プログラムの共同開発などの連携が求められます。

○各館が連携した効果的な広報活動 など

広報活動をより充実させるためには、より魅力ある広報媒体の制作、広報印刷物の発行部数の増加、インターネットなどによる最新の情報発信・情報更新などの手を打つ必要があります。また、デザイン、コピーライティングなどのクリエイティブカも求められます。各施設がそれぞれ単独でこうした広報機能の向上を図ることは、現実的に難しいことです。複数の施設の広報を一元化し、集中的に広報人材を投入し、町田市の文化施設の情報発信スタイルに一貫性を持たせることで、広報に関わる人材と予算を有効に活用しながら発信力を高めることを検討するべきです。

(3) 文化芸術都市の「顔」としての駅前ナビゲーション施設の設置

文化芸術都市の「顔」として、文化の香りを駅周辺に醸成することが期待されます。そのためには中心市街地に町田市の文化芸術情報を案内するナビゲーション施設を設置することが効果的です。人通りがあり、市民が日常生活のついでに立ち寄れる施設は大変重要です。新しい場所を確保できるチャンスを逃さないよう、新庁舎、庁舎跡地、駅前再開発など、あらゆる可能性を模索すべきです。

市内外の人を呼び込み、各施設へ誘導するナビゲーション機能

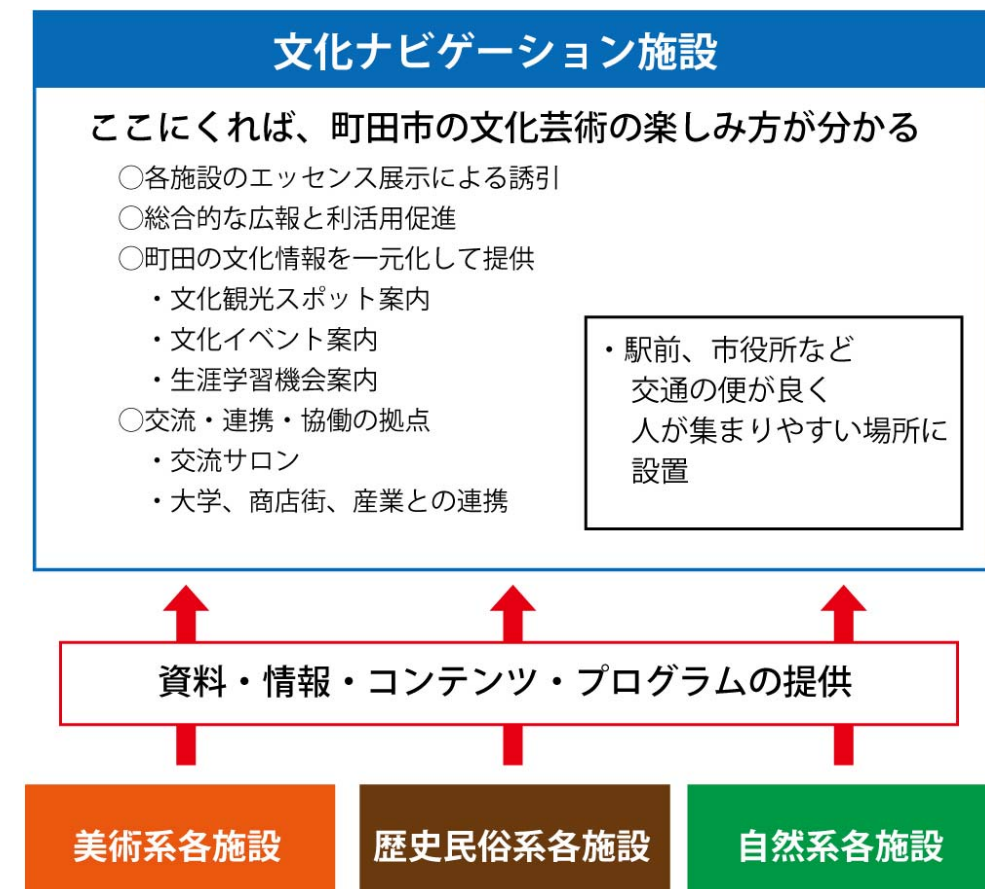
- 駅前の文化芸術ムードの醸成
- 町田市の文化施設・観光スポットの案内

博物館機能を持つ施設の情報が全て得られる情報センター機能

- 広報の一元化
- 講座、セミナー情報の一元化
- イベント情報の一元化

まちと文化施設を結ぶ新しい事業の、発想・交流・企画拠点機能

- 商店街、地域の事業者との連携
- 大学連携情報の拠点
- 活動団体等の交流機能



おわりに

(1)今後の取り組み

町田市の博物館等の最も大きな課題として、個々の施設が別々に活動してきたため全体としての戦略・協力・連携が困難な状況にあるということが、本委員会での検討を通して明らかになってきました。そのため、共通の戦略を持つべき施設のグループを、「美術系」「歴史民俗系」「自然系」として提案し、それぞれのグループの課題を整理しました。町田市役所におかれましては今後に向けて、各グループが一体となって議論、検討を進められる体制を整えることが重要と考えます。

○今後の検討課題

本委員会では、町田市の文化施設を3つの施設群として再編成することを提案いたしました。今後は、各分野を担当する部署が連携して議論を重ね、よりよい博物館事業を実現するための計画を検討して下さい。各分野の施設群の核となる機能をどこに置くか、重複している事業や機能の整理、各分野ごとに共用可能な機能の集約、分野単位での不足している機能の整備などが議論されることを期待します。

(2)立地についての考え方

立地の具体的な場所については町田市の行政課題ですので、委員会としては望まれる立地の条件を挙げます。また、立地検討の際は担当部署だけでなく、関連部署（観光、教育、福祉ほか）や、周辺地域（商店街、駅、大学ほか）とも対話を進め、将来にわたって連携した施策展開が行える様に留意することが重要と考えます。

○集客の視点

集客向上の方策は多々ありますが、企画、広報、情報発信などよりも、圧倒的に立地環境に負うところが大きいものです。交通の便のいい場所にあることはとても重要で、そうでないと集客力は極端に落ちます。現状の施設はそれぞれが小規模で、単独ではにぎわいが形成できません。特に外部や遠方からの集客という観点では、現状のままではあまり期待できません。立地検討の際はぜひとも、交通の便がよく人々が訪れやすい場所を最重点に考慮する必要があります。

○文化ゾーンの視点

同じ分野の文化施設が、ある程度まとまった形でまちの中にあると、文化芸術のまちとしての雰囲気や印象を強く発揮できます。町田独自のまちの持ち味を醸成するためには、まちを構成する強い要因としての文化ゾーンの形成が重要です。

○「わざわざ来場」から「ついでに立ち寄る」への転換

市民の暮らしの中で、単独の施設にだけ出かけるということは稀です。買い物や用事の機会にまちの中を歩きながら回遊し、いろいろな施設が目につくことで、ふと立ち寄れるという環境であれば、芸術文化と商業の相乗効果を生むことができます。立地を検討する際はこの「ついでの効果」が重要となります。例えば、子どもからお年寄りまで幅広い市民が集える広場的な空間を中心に、その周辺に美術館や博物館があれば、ついでに見て回って、気持ちよくなったところで最後に音楽を聞いてレストランに入るなど、商業施設との相乗効果による魅力を発揮し、外来者の集客力向上や、リピーター層の形成につながります。

(3)検討に至らなかった事項

本委員会は短期間で多くの検討事項を与えられていましたが、下記の事項については、検討に至らなかったため、次年度以降検討されることを期待します。

○施設の運営形態

○エコミュージアム

資料

○町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会設置要綱

平成 22 年 7 月 1 日

施行

文化スポーツ振興部文化振興課

第 1 設置

町田市の博物館等の新たな在り方構想の策定に当たり、望ましい博物館像等について検討するため、町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会(以下「委員会」という。)を置く。

第 2 所掌事務

委員会は、次に掲げる事項について調査、検討し、その結果を市長に報告する。

- (1) 町田市の博物館等の新たな在り方構想の策定に関すること。
- (2) 前号に掲げるもののほか、市長が必要と認める事項

第 3 組織

- 1 委員会は、委員 9 人以内をもって組織する。
- 2 委員は、次に掲げる者のうちから、市長が委嘱する。

- (1) 学識経験者 7 人以内
- (2) 町田市公立小学校長会の代表 1 人
- (3) 町田市公立中学校長会の代表 1 人

第 4 委員の任期

委員の任期は、委員会が第 2 の規定による報告をしたときまでとする。

第 5 委員長

- 1 委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。
- 2 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

第 6 会議

- 1 委員会は、必要に応じ委員長が招集する。
- 2 委員長は、必要があると認めるときは、委員会に委員以外の者の出席を求めることができる。

第 7 庶務

委員会の庶務は、文化スポーツ振興部文化振興課において処理する。

第 8 委任

この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

この要綱は、2010 年 7 月 1 日から施行する。

附 則

この要綱は、2010 年 7 月 1 日から施行する。

○町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会 委員名簿

氏名	分野	所属・経歴
1 鈴木 良明	仏教史	鎌倉国宝館長
2 濱田 隆	美術史	元奈良国立博物館長、元山梨県立美術館長
3 渡辺 一雄	文化行政一般	玉川大学教育学部教授、同大教育博物館長
4 小瀬 康行	博物館学	東京家政学院大学教授、同生活文化博物館長
5 前島 正光	まちづくり	NPO法人顧問建築家機構代表理事
6 山口 有次	観光レジャー地域計画	桜美林大学ビジネスマネジメント学群教授
7 上原 敬子	小学校教員	藤の台小学校長
8 篠原 やよい	中学校教員	薬師中学校長

(順不同敬称略)

○町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会 開催日程

○第1回委員会 2010年9月29日(水)

- ・ 検討委員会のスケジュールについて
- ・ 町田市の博物館等(博物館機能を持つ施設)の現状と課題(事務局より説明)
- ・ 地域における博物館等の役割に関する意見交換

○第2回委員会 2010年11月11日(木)

- ・ 博物館等はどうのようにして市民の生活を豊かにすることが可能かについて
- ・ 市民が積極的に参加できる博物館等(博物館機能を持つ施設)の在り方について
- ・ 博物館等を活用した新しい市民活動や協働の担い手の可能性について

○第3回委員会 2010年12月17日(金)

- ・ 各施設の分類と整理
- ・ 博物館の将来像(課題、役割分担、連携など)

○第4回委員会 2011年1月21日(金)

- ・ 報告書骨子(案)について
- ・ 資源の有効活用について
- ・ 博物館機能の将来像について
- ・ 人材の配置と育成について

○第5回委員会 2011年2月14日(月)

- ・ 検討結果報告書(案)について

○第6回委員会 2011年3月2日(水)

- ・ 検討結果報告書(最終案)について

○市長と委員会の対談 2011年11月5日(金)

○市内文化施設視察 2011年11月5日(金)

- ・ 町田市立博物館、町田市立自由民権資料館、忠生公園自然観察センター、町田市国際版画美術館を視察

町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会
検討結果報告書

平成23年3月発行

発行 町田市

文化スポーツ振興部 文化振興課

〒194-0022 東京都町田市森野1-33-10 森野文庁舎 Tel.042-724-2184

町田市立博物館

〒194-0032 東京都町田市本町田3562 Tel.042-726-1531

編集・支援 株式会社トータルメディア開発研究所